

お伽噺
猫の恩返し

作

邑古宙道

2022年1月31日起稿
2023年4月7日終稿

お話しの始まり

私は泥の中で生まれました。お腹を空かせ、冷たい泥の中でふるえていました。「お母さんはどこ」と周りを見渡しましたが、お母さんはどこにもいません。私は精一杯の大きな声でお母さんと呼び続けました。このままだと私は死んでしまいます。

その時、小さな女の子が私を見つけて、泥の中から拾い上げてくれました。私は少し怖かったのですが、女の子の優しい笑顔を見て安心しました。女の子は私を抱いて足早に走り出しました。女の子の家に私は連れてこられました。女の子のお婆さんが出てきて、私を見て最初驚きましたが、泥で汚れてふるえている私を、優しく抱き上げてすぐにお風呂場に連れて行きました。その後のことはあまり覚えていません。でも、お母さんのお腹に潜り込んでいるように、やわらかく温かいタオルの中で、すやすやと眠りました。

私は新幹線というとても速い列車に乗って、見知らない土地に向かっています。お婆さんの温かい胸の中で眠ったりごそごそ動き回ったりして、初めての旅を満喫していました。私がついた土地は広島という街でした。私が拾われた土地から広島がどれほど離れているのかわかりませんが、これから起こることに心配よりもウキウキした気持ちが強かったと思います。

新しいお家につきました。広島で暮らしているお嬢さんにお婆さんは私を預けるつもりのお家です。そのお家は小さな病院でした。病院の二階にお婆さんのお嬢さんと旦那さんが住んでいました。お婆さんはお嬢さんと何か話していたようですが、私にはよくわかりません。夜になり病院の先生があがってきました。この年配の男の人がお嬢さんの旦那さんのようです。二人には子どもがないようで、私がこの夫婦の初めての子どもになったのです。私にはネコのお母さんの記憶がないので、新しくできたお父さんやお母さんとどんな風に関わればいいのかよくわかりません。でも、無邪気に遊ぶ私を、両親は幸せそうに見守ってくれました。そして両親の名前をもらって私は「みりん」と名付けられました。

お話しの続き

私は気ままな毎日を過ごすことができました。お母さんは優しくミルクを飲ませてくれ、お父さんは温かい手の中で私をなでてくれました。1年はアッという間に過ぎました。ある日、お父さんとお母さんが一匹の子猫を連れてきました。その子のご先祖はアメリカに住む、由緒あるお家柄のお坊ちゃまとのことです。私が新参の子猫をいじめてはいけないとのご両親の計らいでしょうか、お坊ちゃまは最初から立派な2階建てのお屋敷住まいで、お屋敷のペントハウスから私を見下ろしていました。

私は柵越しにお坊ちゃまと向き合ってご挨拶をしました。お坊ちゃまはお育ちが良いだけあって、お行儀がよく、上品にお振舞いでした。そんなお坊ちゃまでしたから、私は時にはちょっかいを出したくなりました。やがて、私がお坊ちゃまをいじめるようでもないとご両親は思われたのか、お坊ちゃまをお屋敷からお出しになり、私はお坊ちゃまと触れ合っただけで遊ぶことができるようになりました。それでもお坊ちゃまの無頓着な振る舞いに腹を立て、時には私もパンチでお仕置きをすることがありました。

お坊ちゃまはラッコリンという名前になりました。この名も両親の名前から付けられたとのことです。ラッコリンという名前は少し長いので、私たちは短くラッチと呼んでいます。ラッチは私の弟分として私によくなじみ、キャットタワーで遊んだり、タワーの展望台で二人寝そべって寝室の出窓から外の景色を楽しんだりしました。私はラッチの頭をナメナメして愛情を示してあげることがあります。もっともラッチは、体をきれいに舐めてもらうのが当たり前のような態度をすることがあり、ムカッとします。

その後のお話し

私が思春期になると、益々、私は活発になりました。初めての人でも私は人懐っこく足元をスリスリして親愛の情を表します。一方で、私はひどく怒りん坊の上に冒険好きで、寢室のドアが開くとすぐに飛び込み、大好きな出窓から下界を見下ろします。道行く人の中に窓辺の私に気づく人がいて、「ネコがいる」と話しているのを耳にして少し誇らしくなり、ツンと胸を張ってさらに立派な姿を見てもらいたくなります。他にも私には悪い癖があります。それは爪研ぎと咬み癖です。お家の白い壁紙や木の柱に爪の跡を残したくなるのです。その時の気持ちのよさは言いようありません。その度にお母さんからひどく叱られるのですが、どうしても止められません。ラッチはいつもあきれ顔で私を見ています。また、私の咬み癖はトイレットペーパーを台無しにするくらいではおさまらず、お父さんの大切な服に穴をあけてしまったこともあります。お父さんがひどく気落ちしているのを見ると本当に申し訳なく思い、私なりに謹慎して部屋の隅っこに隠れていました。噛み癖が少しおさまると、今度は吐き癖が出てきました。場所や時間を構わず、食べたものを吐いてしまいます。毛玉吐きか食べ過ぎか、理由は分かりませんが、ご両親を困らせるためにわざとやっているわけではありません。その度に、お母さんやお父さんが「みりん！」と語気荒く私の名を呼び、不機嫌な顔をして吐いたものを片付けてくれます。

ラッチは我関せずの悠々自適な生活態度で、お坊ちゃまの風格を漂わせていますが、私はドブの子、なりふりを構っていません。ラッチは、突然、私に仕掛けて驚かせ、逃げ回る私を悪ガキのように追い回してきます。そんな時には私の美しい尻尾を恥ずかしながら狸のように膨らませてしまします。時に姉さんネコの威厳をみせて、ラッチを追い込んで懲らしめることもあります。ラッチは恐れ入るところか、遊び相手をしてくれることを喜んでいるようです。

お嬢さん誕生のお話し

このお家にも可愛い女の子が生まれました。人間の子供でも、子猫と肩を並べるくらい可愛いことに初めて気付きました。お母さんは子育てで忙しくなりましたが、この家は以前にも増して楽しくにぎやかな声で満たされ、私もラッチも本当に幸せな気持ちになりました。お父さんは病院の仕事が終わって二階に上がってきます。お父さんは、幼いお嬢さんをもつお父さんの年齢にしては少々ご高齢なため少しきまり悪そうに、でも幸せな笑顔をいつも浮かべています。

赤ちゃんの元気な泣き声に引き寄せられて、ゆりかごを覗きました。可愛い赤ちゃんをみていると、私も赤ちゃんを産めたらどんなに素敵だろうかと思えます。人間の赤ちゃんでもこんなに可愛いのですから、ネコの赤ちゃんならもっともって可愛いに違いないと思えます。赤ちゃんにいたずらをしてないように、そして優しく見守るように、私はラッチにしつかりと教えました。でも、ラッチはこの注意を忘れ、ある日、赤ちゃんに飛びつき、赤ちゃんの腕に爪で傷を付けてしまいました。腕白なラッチもさすがに意気消沈し、しばらく身を小さくして、隅っこでうずくまっていました。お嬢さんがラッチのそばに来て「許してあげるよ」とラッチを慰めていました。お嬢さんの腕には今も爪痕が残っていますが、この一件からラッチはお嬢さんの忠実な味方になっています。

あれやこれやの毎日ですが、私たちは幸せな時間を過ごしてきました。代わり映えのしない毎日とはいえ、お母さんは何か新しいことを始めようと考えて、毎日頑張っています。看護の勉強に加えて、英語力を高めようと診察室奥の処置室で夜更けまで勉強しています。お父さんはお仕事が休みの日に、ロフトで家族音楽会を開催し、自作曲を披露しています。お父さんの作る曲は私が寝付くのにぴったりの音楽なので、私は音楽会を楽しみにしています。お嬢さんは可愛い赤ちゃんから美しい女の子に成長しています。活発でとても美しいお嬢さんです。お嬢さんは時々、私やラッチと遊んでくれます。そして私の好物のおやつジェリーを準備してくれま

す。ラッチは相変わらず、悠々とした坊ちゃま暮らしをしていますが、気が向くと私を挑発してリビングからロフトまで走り回る立体運動会に引き込みます。私はラッチのしつこさに腹を立て狸尻尾で逃げ回り、最後に天井の梁柱によじ登らんばかりにしがみつき、イライラして爪とぎをするのでまたお母さんやお父さんに怒られています。

お恥ずかしいお話

私は、1階から2階に上がる階段の上に、ロフトから張り出している梁の上で眠るのが大好きでした。そこは三階のロフトから一階まで吹き抜けになっていて、天窓からはあたたかな日差しがあり、ネコの極楽天国です。ラッチはさすがにここには寄ってくることはなく、まさに私の独壇場でした。

いつものように私はこの梁で気持ちよく寝ていましたが、突然、目から火柱があがり顎の砕ける音がしました。なんと私は梁から転落して階段でひどく顔を打ち付けたのです。最初、何が起こったか分かりませんでした。鼻や口から生暖かい液体が流れ出るのを感じ、私が悲惨な状態であることを直感しました。ネコの作法でこのような時は物陰に隠れて怪我を癒すのですが、鼻や口から血が止まりません。お父さんが私の異変に気づき、飛んできました。すぐにお母さんもきて、私の傷を心配しています。息をするたびに鼻から空気が漏れて血が噴き出してきます。私はただならぬことを感じ、覚悟をしました。でも、お母さんはすぐに動物病院に私を連れて行ってくれました。最初のお医者さんは「数日後に裂けた口蓋を手術するのでそれまで家で看っていて」と適切なことをいいました。数日もこのままだと私は水も食事もとれずに死んでしまうとお母さんは考え、他の動物病院に連れて行ってくれました。そこでは私のケガを手術することはできないとのことでした。でも、そのお医者さんは手術をしてくれそうな病院を探してくれました。お母さんは急いでそのネコ専門病院に私を連れて行ってくれました。その先生が、早速、手術をしてくれることになりました。先生のお陰で私は命拾いをしました。本当にありがたいことです。私が怪我をして床に血をまき散らしたときは、流石にラッチも心配をしてくれました。

恩返しのお話し

何もないようにできっと何かある毎日を、この家族と楽しく過ごしてきました。朝はマイペースのお嬢さんが登園するまで、時間と格闘する大忙しのお母さんは火山噴火をして、目から火花、鼻から蒸気をあげ、そんな時にお母さんに近寄るのはとても危険ですから、私とラッチは隅っこで様子を見ることにしています。バタバタとお嬢さんとお母さんが出かけると、リビングは宇宙の果てにいるように静かです。私は寝心地の良いカーペットやお父さんの膝の上で少し居眠りをします。ラッチはロフトのキャットタワーが好きで、タワーの展望台で寝ています。お父さんが朝の仕事に出るとお昼までネコだけの平穏な時間が来ます。お昼にお父さんが診察から戻ると、お母さんはお昼ご飯を用意して、洗濯物や検査の片付けをしています。お父さんは好きなサスペンスドラマを見ながら居眠りをしますので、私はお父さんの膝で休みます。夕方にはお嬢さんも帰宅し、お母さんは夕食の準備をしていますが、私はおねだりをしてお母さんやお嬢さんからおやつを頂くことがあります。私がいい思いをしていると、必ずラッチが嗅ぎ付けて、私の邪魔をします。ラッチは本当にけしからん猫です。夜はお父さんの寝ている膝の上で休みます。その時、「お疲れさまでした」という気持ちを込めて、お父さんの足をマッサージしてあげます。ラッチもお父さんのベッドで寝ていますが、我関せずといった寝顔です。

こんな幸せな日々が続いていたある日、お嬢さんがひどい病気に感染してしまいました。幸いお嬢さんの症状は軽かったのですが、お父さんやお母さんにうつると大変だろうと思いました。お父さんは歳ですし、重い病気になることも心配でした。またお母さんが病気になると、お嬢さんを始め家族の世話ができず、家全体が大変なことになるのではと心配をしました。この感染症は世界中に広がり、沢山の人が亡くなっていることです。私達ネコ族も感染する可能性のあることを聞きました。こんな厄介な病気が我が家に入ってきたのです。これまでも色んな心配事がありました。家族皆に

災いする出来事はこれまでありませんでした。

私は生まれて初めて神様にお願いをしました。「どうかこの家族をお助け下さい。お嬢さんの病気を早く治してください。お父さんやお母さんが病気にならないようにお守りください。私の願いをかなえていただけるなら、私の命など欲しくはありません。どうかどうか、この家族をお助け下さい。」と。

そして私の願いがかなったのか、お嬢さんはどんどん元気になり、お父さんもお母さんも病気にならずに過ごせました。神様が私の願いをきいてくださったのです。その代わりに神様との約束で、私はものが食べられなくなり、ただ吐いてばかりになりました。私はやせて衰弱しました。でも私は幸せでした。家族の皆から深い愛情を頂けたからです。私は感謝しています。生きる喜びを知ることもなく泥の中で死ぬ運命にあった私を救っていただきました。幾度もケガをしましたが、不自由な体になることもありませんでした。転落して重傷を負った時は死んでも不思議ではなかったのに家族の愛に支えられ生き永らえました。私の命は家族のお陰で何度も救われました。今は私がこのご恩に報いる時です。ありがとう、皆さん。私は幸福です。

最後のお話し

お母さんの並々ならぬ努力の末に、家族全員でカナダに出発できる準備が整いました。お母さんはカナダで上級看護師さんとして働くため、バンクーバーという街の大学に通うことになりました。お母さんはカナダ移住の全ての段取りを一人で準備してきたので、大きな責任を感じており、期待と不安の入り混ざったイライラを起しやすくなっています。お父さんは高齢のために移住に伴う心や体の負担に耐えられるか心配をしています。お嬢さんは海外移住を楽しみにしている一方で、これまで慣れ親しんだ友だちから離れる淋しさを感じています。私は滋賀から広島に移動したことはありますが、カナダ移住がどんなものか、どんな生活が待っているのか皆目見当が付きません。弟分のラッチは心憎いくらい我関せずの態度で何も心配をしていないようにみえます。

今日はカナダ出発の日。ラッコリン家に関わる人たちが見送りに集まってくれました。私とラッチは小さなケージに押し込められ、車の暗いトランクルームの中に閉じ込められて声も出せないほど緊張していました。ネコ族の特性として暗く狭い所は元々苦手ではありませんが、この度の様子は何か変です。小1時間ほど車に揺られ、到着したら変な体重計に乗せられ、荷物札をケージに貼られ、ベルトコンベアで運ばれていきました。そしてケージはネットでぐるぐる巻きにされ、飛行機のお腹にある暗い部屋に押し込まれました。ラッチのケージとは隣同士ですが、ラッチもビビっているのか一言も声をあげません。

静かな時間の後に、耳をつんざく様な轟音ごうおんが始まりました。外の様子は分からないので何が起っているのか不安で小さく蹲り、ただでもよく聞こえる耳を後ろに倒して塞ぎ、恐怖に耐えながら我慢をしました。ラッチも同じ様子でしょうが、ラッチのことまで気遣っている余裕はありません。突然、足元が強い力で引っ張られ、体が横滑りしてケージの壁に押し付けられました。さらに体が空中に浮かぶよう

に感じました。どれくらい時間が経ったのでしょうか、轟音は続いています。体はケージの中で安定してきました。轟音にも慣れたのか最初ほどには気になりません。やたらと眠気がおこり、得意の猫眠りをしようと思いますが、すぐに振動で目が覚めてしまいます。そうこうしている内にやっと轟音がやみました。

荷物の受取場で沢山の人がベルトコンベアの周りで待っています。お母さんやお父さん、お嬢さんの姿が見えません。私たちは見捨てられたのでしょうか。坊ちゃんまのケージを見ると、相変わらず小鳥のように震えて小さくなっています。声を掛けましたが、お坊ちゃんまは「ワオーン」と返事をしたただけでした。

やっとお母さんが迎えに来てくれて、ホッとしたのも束の間、今度はもっと大きな飛行機に乗せられることになりました。最初の飛行機で少し慣れてはいましたが、今度はもっと長い時間、あの暗い小部屋に押し込められる様です。暗闇、轟音、振動、乾燥とどれ一つとっても、私は気を失いそうなほど不安でした。お坊ちゃんまと私はこの長い苦渋の時間に耐えてバンクーバーに着きました。

バンクーバーのお家は広島のお家より狭くて、ラッチに追い掛け回される心配はないようです。ラッチと私はまずこの家の探索を始めました。いたるところで臭いをかいで、怪しい臭いが残っていないか確かめました。他の猫の臭いがあれば警戒しなければいけません。どうやら危険な臭いはなさそうです。私は2階の部屋になかなか良い隠れ場所を見つけました。

到着した日の夕方、バンクーバーに隣接する街に40年近く住んでいる広島出身の女性が私たち家族を尋ねてきたそうです。彼女が広島に里帰りしている時に、お父さんに相談をするため病院に来ていましたが、彼女がバンクーバーの近くに住んでいることからお母さんとも大変仲が良くなりました。彼女は食料品などを用意して訪ねてきてくれました。ラッチは彼女に早々にご挨拶をしたようです。私はこともあろうに2階の秘密部屋で猫眠りをしてしまいました。ベッドで塞がれた壁に隠れ物置があり、私は探索中にこの場所を偶然発見したのです。隠れ物置は暗くて私には最高の場所です。

た。そこにいると旅の疲れがどっと出て、いつのまにか寝てしまいました。

お母さんがカナダの運転免許証を取得するために、必要な書類を依頼していた女性に地下鉄駅で会って受け取ることになっていました。初めての街なので地下鉄駅がどのにあるのが分かってははずもなく、お友達の女性がその場所に車で送ってくれることになりました。出かける段になってお父さんとお母さん、そしてお嬢さんが初めて私のいないことに気づき、大騒ぎになりました。私が冒険好きですぐに飛び出そうとするところがあつたため、ドアの開いた隙に表に出たと家族の人は思ったようです。それで家族全員、もちろんラッチは除きますが、近所を探し回ってくれました。寒いバンクーバーの夕方は早々と日も暮れかかっていました。「みりん、みりん」と近所に呼び声が響きました。近所に住んでいる日系人の方も、防犯カメラをチェックしてそれらしい猫の姿が見えないか一緒に探してくれました。

結局、みりんは見つかりませんでした。お父さんとお母さんは暗い気持ちになりました。私の安全を心配していた空の旅を無事に過ごし、安住の地に着いた矢先に私の姿が見えなくなり、家族がひどく戸惑うのも無理のないことでした。私は野良出身とはいえ本物の野良経験がないため、見知らぬ土地で生き抜くことは難しく、長くは生きられないのではと悲観的な気持ちになったようです。

暗い気持ちを持ちながら、駅で書類を受け取った後、お嬢さんがハンバーグを食べたいというので、お友達の女性はお店を探して夜のドライブをしましたが、良いお店がみつからず、結局は戻ってきたそうです。3人と2匹の家族でバンクーバーの新生活を始めるつもりでしたので、その初日から家族の大切な一人が欠けてしまうというのは思いもよらない出来事だったようです。2階の寝室に家族が集まり、ため息まじりにみりんの話をしていました。その時、ベッドの下から私がひょいと顔を出したので、お父さんが驚きの声をあげました。そして家族全員が驚きと喜びの声をあげました。皆が何をそんなに驚き喜んでいるのか、むしろ私の方が驚きました。

家族は隠れ物置のあることを知らなかったので私を家探し

しても、見つけられなかったのです。でも、この出来事で、家族の大切さが再認識されたようです。家族は一人でも欠けると、その家族らしさはなくなります。家族一人一人の持つ愛がかけがえのないものであり、家族という愛の集合体が家族一人一人の愛を育み、また一人一人の愛が家族全体の愛を豊かにすることが実感された瞬間でした。

私みりんは、数々の問題を起こしてきましたが、ラッコリン家族の一員として大切な存在であることが自覚できました。そのため私が私だけの存在ではなく、家族と共にある存在であることを忘れてはいけないと思いました。私は小さな猫ですが、家族の中では、人も猫も同じ大切な命なのだと自負していいのでしょうか。にやるほど！お終い。